

## 戦争施設に消えたショウロの園

高橋 勝雄

私の生まれ育った所は、千葉県の一部に位置するとある村でした。古来海の底であったと思われる形跡は顕著で、波浪の跡と思しき大地の様子は、九十九里浜より下総台地に至る迄、或る間隔を保ち、砂土域、黒土域、と明確に分かれて居ります。我家のある集落一帯も黒土の底地で、湿地も多くハンノキが田の畔や小川の土手などに多く見られました。そして農家が多く、米、麦、蚕が主な家業で自給自足の営みをして居りました。大人は早朝より夕方遅く迄野良仕事に携わり、子供達は家畜の世話、家事全般を責務として居りました。

この時代には今日のような娯楽施設は皆無で、唯一の楽しみは隣近所の大勢の仲間と遊びに興ずる事でした。其他は、周囲が豊かな自然である故、いろいろな魚取りが身近な所で出来ました。又、大人達が手が空いている時には、近くの松林にきのこを採りに行きました。松林には「ホンキ（ハツタケの地方名）」、「ボグジャ（イグチ類）」等が出生して居りましたが、食する物はハツタケのみで、それも僅かしか採れませんでした。冬が終わり3月に成ると、芝焼した田圃の畦道や、河原の土手に、ヨモギ、チガヤ等が芽吹き、農作業が多忙に成る前の‘3月末頃’、大きな楽しみが有りました。それは隣近所を誘い合い、大勢で遠足を兼



ショウロ

ねた「ショウロ」採りに出かける事でした。

その場所は、集落より約2千米程離れた所にある通称名で新宿山(にいじゅくやま)と地元で呼んで居ります砂浜の松林で、範囲が広く、大勢の人が一度に訪れても、沢山の収穫を得る事が出来ました。又、秋はショウロの他、アカハツ、ハツタケも出生する様ですが、農作業多忙期のため採ることが出来ませんでした。その場所に到着しますと、それぞれ思い思いの場所を目指して散らばって行きました。

私の家族も、草刈鎌、熊手、竹かご等を携え、枝打ち、落葉掻きの済まされた明るい林の中を、以前沢山出生のあった場所へと向かうのでした(…元来日本は地下資源が乏しく、一般家庭に於ける燃料は薪、木

炭、練炭、等が主で、石油、ガスは特殊な区域、若しくは部署のみが可能と成っており、森林の存在は欠く事の出来ないものでした。手入れの行き届いた林は、間伐、枝打ち、下草刈り、落葉掻き、等が定期的に行われる事で、木漏れ陽が地表迄届き、地中に酸素を多く供給し、土質が軟化したのではないのでしょうか…。この明るい林を進み、以前実績のあった場所や、傾斜面の砂丘で、1個でも頭を覗かせる物があれば占めたもの、その周辺を熊手にて掻き分けますと、真っ白な円いショウロが次々と姿を見せてくれるのでした。こうして、楽しい一時を終え、参加した家族は、沢山の自然の恵みをかごに入れ、意気揚々と足取りも軽く家路に向かうのでした。しかし・・・この楽しみが不可能に成る事を誰しもが知る由もありませんでした・・・。

昭和16年12月8日、日本海軍連合艦隊は、ハワイの真珠湾にあるアメリカ軍の基地に対し奇襲攻撃を行い太平洋戦争が始まりました。そして翌昭和17年4月18日、真珠湾攻撃の余韻が覚め止まぬ日本全土に、突如現れたアメリカ軍の爆撃機に驚くと共に、その速さに衝撃を受けました。銚子市の東方海上を航行していたアメリカ軍の空母（ホーネット）より発艦した16機の地上爆撃機の「B25」は、海軍の香取航空基地（未完成）、東京、横須賀、名古屋、神戸、福岡、等を空襲、爆弾を投下し、大陸（中国）方面に去って行ったのでした。この本土、初空襲の衝撃は大きく、戦争の恐ろしさに大きく揺れ動いて行きました。

本土空襲後、香取航空基地の完成が急がれる中、軍は重要施設の建設場所が必要と成り、国が選んだのが基地に程近い新宿山一帯の松林でした。新宿山の地権者には国策名に依り土地徴用が行われて軍の管理下

と成り、一般人の立ち入りはできなく成りました。私たち農村の憩いの場所であった砂丘の松林も戦争という名のもとに奪い去られてしまいました。昭和13年より建設工事の始まった基地も18年3月完成するも、戦局は悪化一途を辿り、日本本土への空襲も日増しに多く成っていくのでした。

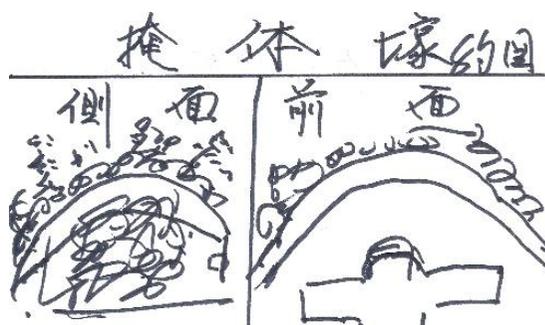
昭和20年3月10日（東京大空襲）、私はその日の事は昨日の事の様に覚えております。その日の夜は吹いていた風も止み、やっと深い眠りに着いて程なく、物凄い轟音に目覚めると、天井の裸電球が地震の時の様にゆらゆらと揺れて居り、家族も全員屋外に飛び出ました。そして更に驚くべき光景を目にするのでした。西の方角の空は真っ赤に染まり、東方の村は家や屋敷林がめらめらと炎を上げて燃えて居り、頭上には何十、何百？機の「B29」爆撃機が銀色に輝く大きな機体を誇らしげに悠然と飛行して居りました。この世の終りかと思う程の恐ろしい夜でした。そして、広島、長崎と原爆が投下され、昭和20年8月15日、無条件降伏をし、終戦となりました。

家を失い、食べ物も無い多くの人々が、路頭の生活を耐え忍び、苦しみの戦後と成りました。そして3年余、基地や軍事施設に徴用されて居りました土地が、国より元の地権者に変換される事になり、農地や宅地へと成って行きました。そんな或る日、私は新宿山が懐かしく、訪れてみました。しかし、其の処で目にした光景は、余りにも変わり果てた自然の姿でした。

荒れた大地に足を踏み込む事をためらい、しばし呆然と立ち竦んでしまいました。身の丈もある雑草、クロモジ、常緑樹のタブ等、その中に崩れ掛かったコンクリートの建物、赤錆た鉄骨が不気味な雰囲気を出していた。

そして、いくつもの掩体壕(えんたいごう：単発(ゼロ戦)などを格納する擬装格納庫、コンクリートでアーチ型を造り、全体を土、草、灌木等で覆ったもの。)、その他。その中でも高射砲陣地跡は、何程の国費が使われ造られたかと思う資材が沢山あり、驚きでした。

しかし、国民の汗と労力の一滴が染み込んだ戦争機材や建造物も長い風雨に晒され、その哀れな姿に、只空しさを覚えるのでした。戦前の様な柔らかい陽射しの差し込む砂丘の松林がこの荒れ果てた大地から再び甦ってくれる事を願いつつ、全身の力も抜け、足取りも重く、淋しさに涙を流し乍ら家路に向かう私でした。□



掩体壕(えんたいごう)

※ 香取航空基地は、旧匝瑳郡椿海村(現匝瑳市)と同郡共和村(現旭市)にまたがり建設された。近隣に掩体壕3基が現存している。(編)

## 雨の日こそキノコ狩り

山本 充弘

君津の山奥、鴨川市に寄ったところに清和県民の森があり、その中に豊英湖がある。そのまた湖の中に豊英島がある。この島にはつり橋で行けるようになっているが、一般の人は侵入できないように門が作られて自然が守られている。ここをフィールドとして「ちば千年の森をつくる会」が活動を行っている。

この会の主催で2013年10月20日にこの島でキノコ観察会が催された。当日はあいにくと朝から雨だったが、それでも多くの人が雨具を持って参加した。集合場所での待ち時間に、私は会員の1人と立ち話をした。彼はこの近くの農家の人だという。「今日はあいにくの雨ですね」と私。「いや、私たちにとっては、雨の日は畑仕事が休みになるので、

こういう時こそキノコ狩り日和なのですよ」と彼。「はあ、そんなもんですか。で、どんなキノコを狙って探すのですか?」と私。「私たちの一番の狙いはモミタケですね」と彼。

私も2013年10月初旬に清和県民の森の一角で初めてモミタケを見つけた。まだ開ききっていない菌であったが、家に持ち帰ってから目方を量ったところ530gもあった。天ぷらがおいしいとの情報に基づいて2度に分けて料理したが、半分食べたところでギブアップした。モミタケを1個収穫すれば、家族全員のおかずを賄って余りあるだろうと思うと、彼らが狙いをつけるキノコであることも理解できる。□